

障害として見るのではなくて、ただの普通の人だよ

という概念を破壊したいなとずっと思っている。

語り手 長沢 光澄（高校一期生 教員） 聞き手 谷口 桃栞

支援学校の現状

—どここの支援学校に勤めていましたか？

僕は京都市のK支援学校に勤めていた。

—自分で専攻して教員になられたのですね。

そうそう。障害の人と何かをするというのが、当たり前前の環境の中で、一緒にしたいなと感じた。

—私がネットで調べたら、今、障害を持つている子たちが急増しているのに対して先生の数には足りていないことから、埋め合わせで支援学校の先生になっている人もいる、というのを見たのですがそれは本当にあるのですか？

うんあるね。最近はいぶ改善されてきて、支援学校を専門にしっかりと勉強してきて、そのまま支援学校で働きたいという人もいる。けれども、少し前までは他の主要教科の採用がされなかった人が、少しでも教育現場に繋がるために、第二の手段で入ってきているという人は、正直多かった。

—私の中で第二の手段で入ってきた方は、自分で専攻された方より心構えが足りていないという偏見があるのですが、実際はどうですか？

人によると思う。最初はどんな世界かな？と思ってきたけど、はまっ

そういう先生は子供からも愛されていて、学年主任などとして、上の方の役職についていく。

でもモチベーションが低い先生もいる。やはりモチベーションが低いとそれなりの行動になっている。だからそれは人によるかな。でもこれはどこでも一緒に社会の縮図が教育現場でもある、という感じだね。

—どういった子供たちがいましたか？

二校行っていて、K支援学校という、地域の子がスクールバスで通うような学校と、S支援学校で職業支援学科というのに行っていた。

元々S支援学校で働いていて、大学卒業後にK支援学校で働いていた。全然障害の重さも違って、目指しているところも違う。K校では生活の安定や、どれだけ人生を楽しく過ごしていくのか、自分を表現しているところ。人として幅を持たせる。その分時間の流れも穏やかになっっているし、様々なことを楽しみながらできる。だからこそ生徒と一緒に触れ合う時間も長い。

子供によって障害の度合いも全然違う。重度で重い子は、自分の思いを言葉で表現しにくい。それが原因で自分を傷つける自傷行為をしてしまう。そういうところから、中々行動の観察だけではわからないこともあって、一個の支援を考えていくのだけど、中々その支援とうまくマッチできないということはとても悩んでいたことだった。

でも、色んな先生に聞いて、「こんなのどう？」というように色々なことを試した。またその子の行動を一日追ってみて、「ここが引き金だ！」とわかった、という瞬間は問題の解決に近づけた。

K校では障害のある子を一かに理解して支援をするのか、といったところが大事で悩んでいたところだった。そしてその子を最後どのような支援に持っていくかというのもむずかしいところだった。企業で就労

できる子もいるし、障害者雇用ワークというところで就労する子もいる。そこにもA型、B型というのがある。あとは生活介護もある。中々自分で身辺自立できない子達は生活介護に行く。少しできる子達がB型雇用に行くべきなのかA型雇用に行くべきなのか、はたまた自分のしたいことを見つけて頑張ってお金を稼げる企業に就職するのか。その子の人生を背負うが故に、その子自身の思いと障害の特性と保護者の願いをきちんと考えた上で、選択していくというのがとても難しかった。

もう一つのS支援学校は軽度の知的障害のある子達が通って、職業学科で学ぶ。少し前までは地域の重度の障害を持つ子供たちが通っていたが、職業学科にしたことで軽度の障害を持っている子たちが増えた。高校生だけ発達段階的には小学校の中学年から高学年。だから意思疎通もできるし、自分の考えもしっかり持っているし、自分の夢も持っている。でもどこかコミュニケーションで少し苦手なことがあったりとか、人の行動が許すことができない場合もある。また言葉通りとらえてしまつて緊張させてしまうこともある。

この子供達は企業就労をするために受験をしてきている。だからモチベーションも企業就労する思いを持ってきてくれている子。軽度だから企業でも普通に障害者雇用枠で働ける。でもそれが故に中学で育成学級が五から六人だったのが、いきなり一クラス倍になる。そして当然男女もいるから、男女のトラブルが発生した。また性に関する問題というのをもとても起きた。そこがとても頭を使った。

―それはとても大変ですね。

やはり人の命に関わることもあったし、辛い経験もあった。その子達の進路を考えなければならぬ。一年生から実習が始まるから。スパーの実習に行ったりした。そこから一年間で五回ほどは企業に二週間

ほど実習に行く。それを三年間積み重ねて、最後自分の希望の進路を見つめる。三年間の中でもとてもその子の気持ちやスキルというのが揺れ動いて、ここでもその子をどこにマッチングしていくのか、というのが難しかった。生徒指導もたくさんきた。気持ち安定しないから、性の問題や暴力や器物破損が起きた。そういったルール、マナーの指導というのがとても多かった。だから四六時中歩き回っていた。そういったしんどさもあった。

問題の解決方法や寄り添い方

―保護者の願いと本人の意思がずれている場合もありましたか？

お母さんやお父さんが自分の子供の障害を理解できていないパターンだと、保護者の意思と本人の意思は大きく離れてしまっていた。家で求められている姿と社会で求められている姿が全く異なっている。「この子は何でもできます。先生」と言われるパターンは中々大変だった。―その場合はどのような方法で解決したのですか？

実習に行つて、一緒に見てもらう。または指導者からの話ではなくて、企業から話をしてもらう、作業所から話をしてもらう、第三者の意見を入れた。学校側は保護者の意見に寄り添いながら、「じゃあお母さん、こういう方法もありますよ。」と提案し寄り添う。どうしてもやはり「やめなさい。」と言われると固まってしまうのが人間だから。

―保護者の方はどのように相談されますか？

大体ね、関心の高いお家はすぐに電話がかかってきて、「先生これはどうですか？」と相談をされる。あとは実習に一緒に行った時に立ち話とかをするかな。他は懇談会かな。この辺が多かった記憶がある。

アドバイス

―私はグローバルAPの授業で「保護者の相談できる場所が少ない」というのを課題にしている解決策として保護者同士が話せるコミュニティを作ろうか、と考えているのですが、現時点でありますか？

PTAや母の会、親父の会などはあるね。その中でも仲がいいところはご飯を食べに行ったりしているね。

―やはり行けない人は行けないですね。

うん、でも集まる場所があったら、孤立してしまうことはないから一定の効果はあると思う。

―そうですね。今実は少し行き詰まっていますどう動けばいいかわからない状況です。

実際に働いていて思ったのは、「このパターンの時はここ」というパターンの数がとても多い。仕事の場合はハローワーク、プライベートのことは就労支援センターとかね。他にもお金の時はここ、とかある。けれどもそこまでして難しいよなってしまう。悩んでいるから、何か窓口が一本になつていて、別れていくのがいいかなって思う。全く違うところにあつて、そこに次はこっち、次はこっちというようになってもいいかなって思う。でもこんなことをしている間に、問題は進んでいくから。複合施設でもいいし、何かチャット形式で繋いでくれるところとか。

―今現時点で福祉に特化したチャット形式のものがありますか？学校で取り扱ったりしていましたか？

ううん、ない。学校は紹介の立場だから。文字相談がきたら、「お母さんこういうところありますよ、お電話繋ぎましょうか？」というようにつなげる。特別支援学校はコーディネーターの立場になっている。

行政的な立場でフォローするのか福祉的な立場でフォローするのか。あるいはそもそも家に入って、家庭内ヘルパーとして入るのか。

現状の問題点

―今学校でも家庭でもいいのですが、問題だと思ふ点がありますか？

障害に対する理解がまだまだ偏見が強いと思うね。S校にいた時に、企業の話聞いてみると「いてくれたらいい」という発言がとても多かった。

―能力がなくてもいいということですか？

雇用率の問題。やはり企業はお金や見た目が大事だから、そこにこだわってしまうのわかるけど、障害がある人が欲しいのか、障害のあるAさんが欲しいのか。

―「いてくれてもいい」という発言は障害がある子がいてくれるだけで会社のブランド価値が上がるからですかね。

それもだし、やはり国からの助成金も得られるし、国から雇用率を企業は命令されているから、もしそれを満たさなければきられてしまうから。だから子を見てない、というのはまだまだ企業に限らず多いよね、という話。例えば街中で障害がある子と出会いました。やはり目につくのは障害があるな、という点が先行する。普通の普段歩いている人とすれ違つても、「この人何だろう？」と変な行動していない限り思わないから。そこを障害として見るのではなくて、ただの普通の人だよという概念を壊したいなとずっと思っている。とても難しい話だけだね。

―私も同じところが改善点の一つだと考えていました。それをもっと特別支援学校の教員とかが、発信してもいいと思う。とても閉鎖された空間なのね、特別支援学校が。山の麓にあつて、やは

りそれは昔からの根強い障害者差別というところが根底にある。だから、クローズな空間で教育が行われている。でも今、学校の先生は、地域協働というテーマで頑張っている。地域の人と何か一緒にするとか、学校を会場にして地域の人に入ってきてもらうとか。

―障害者が社会の一員というのを発信しているということですよね？

そう。当たり前存在だよという認識を頑張って今発信している。

S校は学校の中に喫茶店があって、パンとコーヒーを作って販売している。そして地域の人は普通に買いにくる。

―手応えはありますか？

ある、とても。最初は特別支援学校の中にあるパン屋さん、というイメージで来てくれるのだけど、食べてくれたらそれなりにみんなプロ意識を持って三年間毎日パンを作っているから、美味しい。そしてそれがどう変わるかというのは、このパン屋さん、という表現に変わる。そうだった時に「障害のある子が作ったパン」ではなくて、「このパン美味しいね」となる。このことは、ある一定偏見はちょっと軽減されているのかな、と思う。地域に必要としてもらって、「この人たちが作るパンは職人として美味しいよね」認めてもらう、それが今地域協働として進んでいることかな。だから、やはりプロの技術を持つとくというのは、リスペクトに入るのかな、と今話していて思った。例えば、ワーク製品を値下げで買ってもらうよりも、本気で欲しいと思うものを作って買ってもらった方。でもこれはS校の子に限った話にはなるけどね。

―これはどのくらいの頻度で行っていますか？

毎日。よかったらホームページ見てください。美味しいよ。僕はそこで六年くらい食品加工担当で、パンを一緒に作っていた。

―一度行ってみたいです。

うん。実際に見てみて、何かわかってくるものがあるかもしれない。学校のホームページにカレンダーとか載っているから。

―（ホームページを見ながら）農園もあるんですね。

うん。農園と情報ある。農園は無農薬でやっているし、地域の人たちも古い家が多いから、おじいちゃんおばあちゃんにリアカーで販売している。情報だったら最近チラシ作りもしていて、イベントの受注もしている。

―（地域の方で）こういったのに来られる方は関心がある方ですか？

うん。関心があるね。そこからの伝手で少しずつ広がっていく。やはりそもそも知らないという人もかなり多い。

―これは自分でわざわざホームページ行かないとわからないですか？

うん。あとは今、情報印刷のクラスがチラシ作りをしてビラまきを始めたところで僕は異動してきた。でも障害のある子達の保護者の不安は、この子達は自分がいなくなった後にどうなる？というところが、親亡き後をどうサポートしていくのかというのが、みんな不安感強い。

―今人気すぎて（デイサービス）に入れないですね。

そう。だからそこを解決できたらいいのかなと思うけれども、こういうジョブパークというのがあって、ここが基本的に働くことや暮らしていることを相談のれるところ。だから保護者の人の悩みを一番引き受けているところ。学校外で。またこの所長さんが教員向けに、親亡き後の障害がある子達の行く末の講座を開いてくれる。やはり支援制度とか見える化にしていって整えていって、ある一定のルールを引くということが、安心なのかなという話もあった。あとは保険の制度の話もあった。ジブラルタ生命というのがあって、それは障害がある子達の保険。障害がある子達専門のプランがある会社。

―何をされるのですか？

積立のお金とか、子供が巣立った時に。

―施設以外の選択肢もあるのですか？

グループ訪問とかかな。たとえば一軒の家の一部屋に住んで、世話人さんという人がいる。寮みたいな感じ。最近では形態が変わってきて、マンションの横一棟のフロアが全員グループ訪問という感じのものもある。寮母さんのような存在。

―世話人さんはたりているのですか？

足りているけど、回転率は悪い。やはり給料が低い。まだ教員は安定した公務員の仕事だから、早々やめない。けれども作業所とかだと比較的低い。だからやめてしまう。その結果低いモチベーションの人が集まりやすくなる。

向き合い方

―安定していない子供達との向き合い方とかがありますか？

安定していない時期の子達だと、不安定になる子が多いし、お母さんも心中しようかと思った、という人もいた。そこで学校と連携を取ったりプラスの声をすることで、少し気持ちが楽になったりするか。やはり話すことが大事。チャットなども大事だけれども、それはあくまできっかけであって、家から出ることが必要なかなと思う。信頼できる人や専門的な知識を持っている人のところに駆け込める。それが欲しいと思った時に言える関係性の距離感と時間が大事。今だと相談したい、と連絡しても一週間後とかになってしまいうから。そこにいく前に何かもう一個あったらいいのかなと思う。

―長い時間ありがとうございます。

感想

私も弟が障害を持っているので当事者として実際に障害者の教育現場で働いていた方のお話が聞くことができ、自分事として捉えることができました。やはりまだまだ問題点は多いということが再確認できました。反対に少しずつ改善されてきていて、世間が障害者のことを理解してくれているということも新たに知ることができました。私も自分の活動を進めて、少しでも福祉の問題点を解決できるように頑張りたいと思いました。



右：聞き手 谷口 桃栞

左：語り手 長沢 光澄さん